様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４６７７

研究課題名（和文）生徒の思考・判断・表現力を育てる英語授業における発問ストラテジーの開発

研究課題名（英文）Development of Questioning Strategies in English Classrooms to Facilitate Students' Thinking, Judgement, and Expression

研究代表者
田中　武夫（TANAKA, Takeo）

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：５０３２４１７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語授業において教師による異なるタイプの発問をいかに連携させれば、生徒の英語による思考力・判断力・表現力を育成することができるかを考察し、教師発問の活用方略について具体的に提案した。具体的には、英語授業を次の5つの領域である「聞く」、「読む」、「話す（やり取り）」、「話す（発表）」、「書く」指導に分け、授業の導入での発問、教科書本文や英文テキストの聞き取りや読み取りにおける事実発問、推論発問、評価発問、そしてスピーキング指導やライティング指導における表現活動までを見据えた発問について具体的に検討し、どのように異なる発問を連携させるべきか発問の活用方略について整理してまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
表面的な理解で終わらせずに、いかに生徒の深い理解を導き、テキスト内容をもとに生徒の意見や考えを英語で表現させるかは、英語授業の課題である。教材内容に生徒を対峙させ思考・判断・表現力の育成を促す発問を教師がどのように作り出せばよいか、その方策を考え提示することは、教師にとって極めて重要である。具体的な発問タイプを区分し、どのように発問を連携させて授業を展開していけばよいかを明らかにすることは、聞く・読む・話す・書くといった４技能のいずれの指導においても応用することのできる、生徒の思考・判断・表現力を促す発問づくりにおける英語教師の支援となるプロセスを具体化し提案することは貢献すると考える。

研究成果の概要（英文）：This study explored how different types of teacher's questions are used in English classes to develop students' thinking, judgment, and expression abilities and presented examples of strategies of teachers' questioning. Considering five areas such as teaching of listening, reading, speaking (interaction), speaking (speech). and writing, we considered how questioning strategies including fact-finding questions, inferential questions, and evaluative questions are used effectively using textbooks and developed specific questions used in pre-, while-, post-activities in English classrooms.

研究分野：社会科学

キーワード：発問　思考・判断・表現力　英語授業　英語で行う英語授業

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

英語の教科書には、幅広いテーマを扱ったテキストが使われ、その内容も豊かなものが多い。しかし、教科書の本文をどのように扱って、授業をデザインするかについては教師に任され、指導のあり方が十分に議論されていないのが現状である。また、表面的な理解で終わらせずに、いかに生徒の深い理解を導き、テキスト内容をもとに生徒の意見や考えを英語で表現させるかは、教師にとって共通した英語授業の課題である。

その中で、教材内容に生徒を対峙させ思考･判断･表現力の育成を促す発問を教師がどのように作り出せばよいか、その具体的方策を考え提示することは、指導の中で課題を抱える教師にとって極めて重要である。とくに、教師が生徒に投げかける発問タイプを分類し、どのようにそれらの発問を連携させて授業を展開していけばよいかを明らかにすることは、聞く･読む･話す･書くといった4技能のいずれの指導においても応用できる教師発話を支援する上で重要であり、本研究の意義として大き特色があるものと考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教科書本文を扱った英語授業において、教師による異なるタイプの発問をいかに連携させれば生徒の英語による思考･判断･表現力を育成できるか考察し、教師発問の活用方略を提案することにある。本研究での発問とは、生徒に対する教師の問いであり、生徒が主体的に英語を用いた4技能の活用および読解･表現活動に向き合えるよう、授業目標の達成に受けた計画的な教師の働きかけを指す。本研究における「思考･判断･表現力」とは、教科書の本文で筆者が伝えようとするメッセージを理解し、本文と自分がどう関連するか深く考え、内容に対する考えを表現することを指し、読者自身の問いをもってメッセージと主体的に対峙する認知的試みであると捉え、教材の内容に迫る教師の計画的な発問が、生徒の英語による思考･判断･表現力の育成を促す起点になると考える。

3. 研究の方法

本研究では、聞く･読む･話す･書くといった4技能の育成を目指した英語授業において、同時に生徒の英語による思考･判断･表現力の育成を促す発問の作成および活用方略を提案することに目的がある。次の3点で研究を進めた。1) 生徒の英語による思考･判断･表現を活性化するために、授業における活動の前･中･後の段階において、どのような事実発問、推論発問、評価発問が実際に可能であるか発問を具体化する。2) 生徒の英語による思考･判断･表現を活性化するために、授業における活動の前･中･後の段階において、どのように事実発問、推論発問、評価発問を連携させるべきか発問の活用方略を明らかにする。3) 事実、推論、評価発問を活用し、生徒の思考･判断･表現力を促すことができる、英語授業で実際に活用できる具体的な発問例を整理し提案する。

4. 研究成果

聞く･読む･話す･書くといった4技能の育成を目指した英語授業において、生徒の思考･判断･表現を活性化するために、どのような事実、推論、評価発問が実際に可能であるか具体的な発問の考察を行い検討した。その結果は、以下に示す通りである。ここでは、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと（やり取り）」、「話すこと（発表）」、「書くこと」の指導に分け、発問の要点とその具体例について述べる。

(1) 「聞くこと」の指導における発問

聞く力を育てる発問づくりを考える上で、次の4つの観点からの発問づくりが重要となる。

① 大まかな情報を聞き取らせる

英語での聞く力を育てるために、まずは、大まかに情報を把握し聞き取ることに慣れることが重要である。聞く活動に入る前に、例えば、話題、キーワード、登場人物、人物の関係や行動、会話が行われている場所、などを尋ねる発問を行うことが考えられる。

② 詳細な情報を聞き取らせる

聞く活動中においては、詳細な情報を聞き取らせるために、例えば、誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どのように、といった観点で詳細情報を尋ねる発問が考えられる。

③ 聞き取ったことをもとに推測させる

さらに聞く活動の中で、英文中に直接述べられていないことを尋ね、音声を何度も聞かせる機会を作り出せる。例えば、会話の場面、人物の言動の理由･態度、話の要点、登場人物のこの後の言動などを尋ねる推論発問が可能である。

④概要や要点を把握し，英語で説明させる

聞く活動の後に、テキスト内容に対する生徒自身の意見や考えを尋ね、生徒の思考を深めることができる。例えば、会話の最も重要なことは何か、一貫して述べられた内容は何か、内容の要約、内容に対する生徒の意見、人物の態度や意見に対する意見、などの発問が考えられる。

(2) 「読むこと」の指導における発問

読む力を育てる発問を考える上で、次の5つの観点からの発問づくりが重要となる。

① 導入で生徒の興味･関心を高める

英語のテキストを読み始める際、活動の前に生徒の興味･関心を高めることは、テキストを読み進めるために重要である。そこで、例えば、話題に関する既知情報、生徒の経験や考え、本文のタイトル、教科書の写真やイラスト、テキスト主題、生徒の先入観などを尋ねる発問が有効であると考えられる。

② 大まかな情報を読み取らせる
読む活動の中で、英文テキストの大まかな情報を読み取らせることで、テキストを読む見通しを立てることができる。そこで、トピック、キーワード、登場人物、時や場所などの設定、話の展開、文章の目的や動機などを尋ねる発問を行うことが考えられる。
③ 詳細な情報を読み取らせる
読む活動の中で、英文テキストの詳細な情報を読み取らせる場合、例えば、キーワードの確認、具体例の確認、イラストや図表の意味、中心となる語句や文、段落・展開ごとの要旨、筆者の主張や結論などを尋ねる発問が有効であると考えられる。
④ テキストに書かれていない情報を推測させる
読む活動の中で、テキストに直接書かれていない情報を推測させることで、テキストをさらに深く理解させることができる。そこで、登場人物の言動の意図、人物の具体的な心情、登場人物の行動やセリフ、語句や表現の選択の意図、文章全体の要約や主題、筆者の態度や意見、などを尋ねる発問が考えられる。
⑤ 読んだことをもとに生徒の経験や考えを引き出す
読む活動後において、生徒に深くテキスト内容を読み取らせるために、読んだことと生徒の経験や考えを結びつけることが重要である。そこで、英文テキストを読んでどう思うか、同じような経験はないか、面白いなと思ったところはどこか、共感したところはどこか、自分だったらどう行動するか、考えが変わったことはあるか、などの発問が考えられる。

(3) 「話すこと（やり取り）」の指導における発問
話す力（やり取り）を育成する発問を考える上で、次の3つの観点からの発問づくりが重要となる。
① 即興で話をさせる
英語を使って即興で話を促すためには、トピックを簡単にすることが重要である。身近な話題や関心のある話題をもとに、すでに生徒の頭の中にある情報や知識を使って英語で言えることを尋ねることである。そこで例えば、誰が、何が、どこで、いつ、どちらが、どれくらい、などに関する大まかな情報を尋ねる発問を用い、その場での会話を促すことが考えられる。
② 会話を継続させる
話す活動の最中において、即興でのやり取りを継続するためには、相手が話した内容に対して興味をもって、相手の発言を受けて話をつなげることが求められる。例えば、誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どのように、などの観点で内容を具体的にする発問が考えられる。
③ 会話の内容を深める
話す活動の最中、生徒との会話の内容を深めるためには、どうだったか、理由は何か、具体例を挙げる、そのときの気持ち、感想、学んだこと、などを尋ね、会話の内容を深めていく発問が有効であると考えられる。

(4) 「話すこと（発表）」の指導における発問
話す力（発表）を育成する発問を考える上で、以下の4つの観点からの発問づくりが重要となる。
① 目的・場面・状況を考えさせる
話す活動に入る前に、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じ、内容や表現を考えてみることが重要である。例えば、話す活動の目的として、新しい ALT に自己紹介、姉妹校の生徒への学校紹介、ALT へ日本文化紹介、姉妹校に自分の地域紹介、新製品をプレゼン、感謝スピーチ、などの場面を具体的にイメージさせるような発問が可能である。
② メモなどを活用して発表させる
メモなどを見ながら発表する練習は、自信をもって人前で発表できるようになるために重要なステップである。メモを使った発話をさせる際、例えば、何を話すのか、いつのことか、どこでのことか、どのように感じたのか、なぜそう感じたのか、そこから何を学んだか、などを尋ねる発問が有効である。
③ まとまりのある内容を発表させる発問
生徒にまとまりのある内容を発表させるためには、話す内容を広げたり深めたりしておく必要がある。そこで、話す内容について、例えば、トピックは何か、いつのことか、感想は何か、心に残った思い出は何か、学んだことは何か、将来してみたいことは何か、などを尋ね、生徒の思考をサポートすることができる。
④ 説得力のあるスピーチをさせる
話す活動の最中、あるいは、活動後に、スピーチに説得力をもたせるためには、何が大切かを考えさせることが必要である。そのため、例えば、誰がスピーチを聞くのか、どこで発表するのか、どんな発表をすべきか、何を見せるべきか、提示する情報の順番はどうすべきか、最も伝えたいことは何か、などを尋ねる発問が考えられる。

(5) 「書くこと」の指導における発問
書く力を育成する発問を考える上で、次の7つの観点からの発問づくりが重要となる。
① 目的・場面・状況を考えさせる
書く活動に見通しをもたせるために、書く活動に入る前に、例えば、何の目的で書くのか、誰に向けて書くのか、読み手はどんな状況か、何を書けば伝わるか、どう書けば伝わるか、書く分量に合った内容か、などの発問をすることが有効であると考えられる。

② モデル文から役立つ語句や表現に気づかせる
モデル文を提示し、そのモデル文の表現や書き方を参考にさせる際、例えば、導入の方法、トピック、具体例、文章の構成、書き方の工夫、終わり方などについて尋ねる発問が考えらえる。
③ 書きたい内容を絞らせる
書く内容を絞るためには、リストアップさせたり、キーワードで要約させたり、選択させたりする発問が有効である。例えば、書く内容を選ぶ、キーワードを見つける、最も伝えたいことを考える、気持ちを考えるなどの発問が考えられる。
④ 具体的な事柄について書かせる
書く活動に入る前に生徒のアイデアを具体化するために、例えば、どこで、いつ、何を、なぜ、どのように、何を学んだかなどの観点で尋ねる発問を使うことが考えられる。
⑤ 事実や考えを整理させる
事実や考えを整理しながら、さまざまな見方や考え方ができるよう支援することも重要である。そこで、例えば、アイデアの利点･欠点を挙げる、アイデアの利点の具体例を挙げる、共通点･相違点を考える、データを分析する、情報を比較する、最終的な意見を決定するなどを促す発問が考えられる。
⑥ 目的に沿って適切に, まとまりのある内容を書かせる
一貫性のある文章を書かせるために、目的に沿って内容を考えさせる必要がある。そこで、例えば、目的を考える、読み手を考える、書く分量を考える、書く内容を考える、書く順番を考える、説明を追加するなどを促す発問が考えられる。
⑦ 理由とともに考えを書かせる
社会的な話題について考えを書かせるときには、生徒の考えをその根拠となる生徒の経験と結び付けることが必要となる。そこで、例えば、既知情報を活性化する、視覚情報などで具体的にする、その話題の良い点･悪い点を考える、補足資料を比較させ立場を明確にする、自分の考えを述べるなどを促す発問が可能である。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計2件）
① 田中武夫、「知っておきたい発問の基本」、『英語教育』、66、2017、10-12 （査読なし）
② 田中武夫、「授業準備で何をすべきか：授業づくりのチェックリスト」、『英語教育』4 月号、2016、13-15 （査読なし）

〔図書〕（計1件）
① 田中武夫･田中知聡、明治図書出版、『主体的･対話的で深い学びを実現する英語授業の発問づくり』、2018、143

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。